角川文庫
—3922—

殺人試写室

小林久三

角川書店

昭和五十二年六月十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

殺人試写室

著作者　小林久三

発行者　角川春樹

印刷者　中内佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京③一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　暁印刷・本間製本

0193-143802-0946(0)

殺人試写室

小林久三

目次

第一章　墜死の目撃　七
第二章　色彩の消失　二八
第三章　幻のフィルム　六〇
第四章　動機の迷走　一〇三
第五章　昭和十九年二月十五日　一三六
第六章　戸塚撮影所第三ステージ　一七三
第七章　第二の葬列　一九二
第八章　黄色い霊柩車　二三八
第九章　蒼ざめた傾斜　二八〇
第十章　傷だらけの肖像　三〇二
第十一章　喪服の試写室　三四〇
解説　中島河太郎　三六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

殺人試写室

〈北風日誌〉

［昭和十九年度極西映画作品。旬刊キネマ誌ベストテン第一位（戦後選出）。製作田島省三。監督伊谷純也。脚本江沢暎一。撮影丸山幸明］北関東の小都市を舞台に、ある女性の悲劇的運命を描いた名作。リアリズムに徹した演出と尖鋭なキャメラ・ワークで、日本の貧しさをえぐり話題をよんだが、当時の検閲当局に忌避され、一般には公開されず、関係者のあいだでは〝幻の名作〟といわれている。モノクロ。七巻。

日本映画辞典（白羊社刊）

第一章　墜死の目撃

1

車窓に、こまかい霧のような雨滴が白く吹きつけてきた。

昼すぎから降りだした雨は、夕方三時半ちかくになってもやむ気配がなかった。

極西映画企画室員、江沢暎子は、電車のなかから、車窓の風景を眺めていた。光沢のない暗灰色の雲が、低くあたりをおおっている。その下で、いつもみなれている沿線の風景が、ぜんたいに色彩感に欠けた暗い荒涼とした眺めに映った。その暗さに、暎子はふと得体のしれぬ不安におそわれて、座席からからだを起こした。

〈とんでもないことが起こりそうだ〉

助監督の宮地晃が、二、三日前にいった言葉が頭の奥深いところから甦ってくる。

とんでもないこと、とはどんな意味だろう。

暎子は、車窓にぼんやり視線をあてながら、そう考えた。とんでもないことが、宮地とわたしのあいだに、起こるというのだろうか。それとも、宮地がいま助監督としてついている都築監督の「幻の砦」の撮影に、なにか重大なことが起こるという意味だろうか。

べつに心当たりはなかった。

暎子は軽く吐息をつくと、頭を振った。宮地の言葉に深い意味はないのだ。彼の言葉がへんに気になるのも、それだけ、彼の存在がわたしの意識の深部に突き刺さっているからだろう。神経質になることはないのだ。

電車は戸塚駅を過ぎた。

次の大船駅まであと十分。渋谷の極西本社から撮影所のある戸塚までは、横須賀線でよくくるが、その先の大船まではほとんど足をのばしたことがない。

暎子は腕時計をみた。三時十九分。

〈都築監督は、ちゃんと一番線のホームの端で待っていてくれるだろうか〉

暎子は無意識に膝のうえの紙袋に目を落とした。部厚い紙袋の中身は、シナリオの生原稿だった。アメリカの一流ライターのアイラ・ベーンが書いたシナリオを翻訳したものだ。

題名は「影の方舟」。都築監督が、ハリウッド大手のNAS社に依頼されて、今年の夏、ニューヨークを舞台に撮影する製作費五十二億円の大作だった。十年前にカンヌ映画祭で最高金賞をはじめ、数々の世界の映画祭の賞を獲得し、日本映画最高の巨匠といわれる都築昭彦の力量にハリウッド資本が目をつけたわけだが、もし「影の方舟」が作品的に成功すれば、文字どおり〝世界のツヅキ〟の名声を確固としたものにするだろう。

撮影開始は、七月十二日。都築は、いま戸塚撮影所で撮影中の「幻の砦」が完成ししだい、助監督の宮地とともにニューヨークにとぶ。その打合わせのために、プロデューサーの奥山久志が、

今夜七時半羽田発のパンアメリカン機で、ロスアンゼルスに向かう。奥山は「影の方舟」の製作助手として、都築の到着までに現地の撮影態勢をととのえておくのだ。

〈〝世界のツヅキ〟への道は――〉

いま着々とひらかれつつあるのだ、と暎子は思う。疲弊しきった日本の映画界のなかで、都築昭彦の監督生命が、年々、むしばまれていくのをみているのは耐えがたい。戦後三十年近くのあいだ一貫して日本映画をリードしてきた都築の存在を支えていくには、日本映画界の力は衰弱しすぎた。彼がもつ才能のスケールをうけいれるには、日本映画の市場は縮小されすぎたのだ。つまり、かれの作品は金がかかりすぎて、製作費すら回収できなくなっている現状なのだ。

現に、いま都築が撮影中の「幻の砦」の製作費は一億二千万円。八年前、彼がつくった「死との契約」の製作予算は二億六千万円で、倍以上の予算規模と製作日数を誇っていたものである。

〈「幻の砦」の製作費も〉

と、暎子は考えつづけた。都築が一年がかりで黒木映画製作本部長を説得しつづけて、辛うじて認めさせた金額なのだ。それも、都築には三年ぶりの仕事だった。極西ばかりではなく、日本映画の大手五社の映画製作本部長は、口をそろえて、

「うちには金のかかる巨匠は不要だ」

と、公言し、低予算ですむヤクザやポルノ映画の量産に血道をあげていた。したがって、各社の第一級監督たちが映画をつくる機会はほとんど失われた。彼らは精神的にも生活的にも追いつめられ、都築とならんで日本映画の二大巨星とうたわれた東洋映画の伊吹監督が、去年の十月に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自殺をはかるという、いたましい事件が起こった。そんな状況のなかで都築は、

「退廃した日本映画を甦らせるのだ」

と、いきごみ「幻の砦」の企画を実現させた。脚本はみずから書きおろした。これまで、骨太い男性的な傑作をつくりつづけてきた彼が「幻の砦」では、一転して、女性を主人公にして、女性の心理をキメこまかに描くという方向に転換した。筋書は、地方の名家にうまれた女性が、ライバルの女性への対抗意識から愛してもいない弁護士と結婚し、夫を殺し、裁判から獄中生活のなかで、人生の深みにふれていくという内容のものだった。時代は、戦前から戦中、戦後にいたる都築好みのスケールの大きいものだったが「幻の砦」の脚本を読んだ映画評論家たちは、

「やや古風だが、人生とはなにか、愛とはなにかを鋭く追求した作品で、戦後かかれたシナリオのなかでも屈指の名作」

と、一様に絶賛し、脚本のなかにみなぎっている若々しい情熱とエネルギーをほめ、都築の作品系列のうえからみて、この映画は大きな転換点になるだろうと指摘し、映画の完成に大きな期待をよせた。封切りは三月二週。

映画化実現に際して都築昭彦は、さまざまな屈辱的な条件をのんだといわれるが、この映画が完成し、さらにハリウッド資本でつくる「影の方舟」の演出に成功すれば、彼は今後、世界の映画市場を舞台に映画をつくっていくことになるだろう。都築も、年齢的に若いとはいえない。三週間後の三月二日で、五十六歳になるはずである。その意味で、今年は彼が日本映画の巨匠から、世界の巨匠に飛躍するかどうかの最後の賭けともいえる運命的な年といえるだろう……。

暎子は、視線を車窓に移し、窓ガラスを掌でぬぐいながら、外の風景に目をこらした。そろそろ大船駅のホームがみえてくるはずだった。

今日二月九日の昼前、撮影所の宮地から、本社の映画製作本部企画室にいる暎子に電話がかかってきた。宮地は、都築監督からの伝言だが、と前置きすると、

「今日の午後三時半に、大船駅に『影の方舟』のシナリオをとどけてくれないか」

と、いった。いつもの歯ぎれのいい口調だった。

「大船駅に？」

届け先の場違いな感じに戸惑って、暎子は思わずきき返した。

「二時半から、大船駅のホームで〝盗みどり〟をやっている。三時半には終わる予定だ。監督はけさも翻訳家に電話をして急がせていた。一刻もはやく読みたいのだろう」

「わかったわ」

「かならずたのむよ。待たせると、監督はうるさいから」

と、宮地は押しつけがましい調子でいった。

大丈夫、まちがいなく届ける、と応じて暎子は苦笑した。苦笑しながら、宮地も都築に似てきたな、と思った。都築は、作品のうえで完全主義者であり、徹底した仕事の鬼だった。自分の演出する映画の、出演俳優の顔型から小道具のひとつまで、彼の美学で統一した。そんな性癖は、私生活のあらゆる面にも色濃く出ていた。服装から身の回り品のいっさいを黒一色でととのえて

いるのも、そのあらわれだが、時間にもきびしく、極西社長に会うときでも、社長が待合わせ時間に一分でもおくれると、そっぽを向いてひとことも口をきかないといったエピソードなど、べつにめずらしいことではなかった。撮影所で〝ヒットラー極西版〟とカゲ口をたたかれる理由だが、そんなかれのチーフ助監督を長年つとめている宮地の喋り方や性癖が、かれに似てくるのは当然だろう。

「じゃ、三時半に大船駅で」

と、暎子はいい、あなたも大船にいっているの、ときいた。

「もちろん」

「会えるわね、駅の撮影が終わったあと」

「ああ。今夜は久しぶりに撮影がない」

「そう」

と、答えて暎子は乳房がこわばるのを意識した。「幻の砦」が一か月前にクランク・インしてから彼とゆっくり会える機会がなくなった。撮影所でたまに会っても、コーヒーをのむくらいの時間しかない。ゆっくり会って、彼がふともらした、とんでもないことが起こりそうだ、という言葉の意味をたしかめてみたい。

暎子はそう考えて、じゃ、と受話器を切ろうとした。

「ちょっと待ってくれ。これも監督の伝言だが……」

と、宮地はいい、しばらく間をおくと、

「大船にくるには、東京駅から横須賀線にのるといい。坐ってこられるよ」
と、いった。都築らしい、こまかい配慮だった。
「わかったわ」
暎子は、素早くこれから翻訳者の杉守直人の自宅をたずね「影の方舟」の原稿をうけとるのに要する時間を計算しながら、おうむ返しに答えた。いますぐ本社を出て、中野の杉守の家をたずね、東京駅に引き返すとすれば、十四時三十八分発というのはギリギリの時間だろう。
「都築監督は大船駅のどこにいるの」
「一番線ホームの戸塚よりの最先端に立っているという話だ。東京からのってきて、いちばん右よりにみえるホームだ」
宮地はそう念を押すと、電話を切った。

東京駅発十四時三十八分。
暎子が東京駅の横須賀線下りホームについたときは、発車のベルが鳴りひびいていた。ドアがしまるまぎわにとびこんだ彼女は、十五両連結の最前部の車室にいき、進行方向右がわの窓ぎわの席についた。この位置からだと、大船駅の一番線ホームに立った都築の姿をとらえやすい、と考えたのだった。
電車は、霧のような雨のなかを時速八十キロのスピードで大船駅に向かって疾走していた。大船駅の一キロほど手前から、横須賀線下り電車は、それまでの直線軌道から、右にゆるやかにう

ねりながら、最左端の第三ホーム六番線ホームに滑りこむ。その右に蛇行していくあたりから、車窓に灰色の駅舎がみえ、まもなく三本のホームがみえてくる。

暎子は、暗灰色の視界のなかに浮かびあがったホームに、遠い視線を投げた。窓外は、夕暮れどきのように暗くなりはじめている。ホームにはすでに灯りがついていた。灯りをつけて、淡い闇のなかに帯状に浮かびあがった三本のホームは、冷えびえとした鋭い孤独感のようなものを放射していた。

暎子の目が、第一ホームの最先端にとまった。最先端に立った豆粒ほどの男の黒い影が、ズームアップするように、急速に彼女の目にとびこんできた。

〈都築監督だ！〉

暎子は胸のなかで低く叫んだ。黒のサングラス。黒いスーツ。細身の黒いスラックス。ファッション感覚には、人一倍うるさい映画監督のなかでも、もっともお洒落だといわれる都築にふさわしい服装だった。

電車は、ぐんぐんホームに接近した。

都築は煙草をくわえながら、となりに立った男となにごとか話しあっていた。これも黒っぽいスーツを着て、肩から撮影機を吊るしている。三十五ミリのアリフレックスキャメラだった。

〈撮影技師の秋津だ。宮地はどこにいるのだろう〉

暎子は、同じくらいの背丈の二人の男をみつめた。彼女の目のなかで、秋津はキャメラを彼女ののっている電車に向け、すぐにホームの中ほどのほうに急ぎ足で移動しはじめ、ホームに立っ

た人影のなかに消えた。

都築は、相変わらずホームの端に立ったままで、視線をこちらに向けたようだった。電車とホームの距離がさらに接近した。

中背。痩せて削げた頬。都築にみまちがえようがなかった。少女のころから彼に接しているのだ。暎子は窓をあけて、都築に手をふりたい衝動を感じた。「幻の砦」の撮影にはいってから、さらにいちだんと頬の肉が落ちて、鋭くなったような気がする。

暎子の視界がふいに閉ざされた。

電車が、陸橋に接近したのだ。線路をまたいで架けられた陸橋で、駅によって東西に分断された市街地をむすんでいるが、林立したコンクリートの橋脚が、彼女の視線を遮蔽する役割を果たしたのだった。

一瞬、都築の姿を見失って、暎子は眼瞼を指の腹で押えた。そのとき、突然、自分がのった電車がすうっと地の底に沈んでいくような奇妙な失墜感におそわれた。短いが、強烈な感覚だった。疲れているな、彼女はさらに強くまぶたを押えた。

2

電車は少しずつ減速した。

迂回しながら第三ホームに近づいていく。

遮蔽されていた妨害物が背後に去り、暎子の目にふたたび都築の姿がみえはじめた。視界を遮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com